片岡　優子　氏の学位審査結果の要旨

主査：淺井 昭雄
副査：蔦　幸治、野村 昌作

2014 年以降、脳梗塞急性期治療におけるエビデンスレベル A を獲得した経皮的カテーテル血栓回収療法の発達は、得られた血栓病理に基づく脳梗塞病態解明という新たな研究アプローチをもたらすことになった。申請者らは、近年注目される担癌患者の脳梗塞発症とそのメカニズムの解明の手がかりとして、経皮的カテーテル血栓回収療法により得られた血栓検体の組織学的検証の有用性を後ろ向きに調べることを企画した。対象は申請者が大学院時代に国内留学した国立循環器病研究センターにて脳梗塞急性期脳主幹動脈閉塞例に対し血管内治療で回収された血栓を病理組織学的に評価しえた 180 症例である。対象を担癌群 17 例、非担癌群 163 例に分け、各群における HE 染色上で血栓内の赤血球成分、フィブリン・血小板成分の割合を先行研究に習って算出し比較検討した。結果として、担癌群は非担癌群と比較して、血栓性内のフィブリン・血小板成分の割合が有意に多く、赤血球成分の割合が有意に少なかった。フィブリン・血小板成分割合≧55.7 %かつ血清 D-dimer 値≧1.3 mg/dl である患者の担癌状態に対するオッズは 7 倍であった。本結果は、担癌患者における急性期脳主幹動脈閉塞の病理学的特徴の新たなエビデンス構築に寄与するもので、臨床的意義は大きい。故に、本研究は博士（医学）の学位に値すると判断した。